

作復

お尋ねの件々うけたよはりいふど

舎にばかり編つて居る小生に賢明なる現

世の青年を教ふるとか欠点を指すとかい

ふやうな事が出来ないのでは無く且自

分ちる青年の中間人とした言うて年の上か

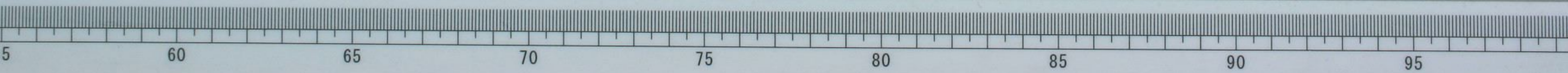
ら申しても甚なおいふなと言はれやうと

これがソヤには。

今、桜散る庭に面してしつかに聖書を

くり返し、天の鳥を見よ、野の百合は

いかにしてそたつかを思つ、おはれむづ



くり返し、天の鳥を見よ、野の百合は

いかにしてそたつかを思つ、あはれむづ

さは我れ人^{ひと}にけうかま、自か^こは世^よに立ま

ず人と交はらで草^{くさ}に老^おうやよろどせ

わが肉は何ものようも弱し、されどわが

心^{こころ}は詩にふうて生^なく、おもふ自か^こは詩

にかくれぶらしならんには有り甲斐もな

き命^{いのち}をりけむと、されば世に自か^ことひと

しくつたまる人^{ひと}は、^{さだめ}藝術の苑に

いついつに力有、しめて、

かけ入りも、剪^き紅裁^{せうさい}線^{せん}をかき命^{いのち}を神^{かみ}にあ

つらつなば幸^{さいわい}なるべきと存^{ぞん}じは。

学生生活も尋常小学校を卒^{そつ}はしはかり

にけ。

ついでにまは草をいづきと存じぬ。

学生生活も尋常小学校を卒へしばかり

の身には無意味の言にや。沼の岸に草を

敷きて美をひらぎ、夫そがれかゝる丘に

停りみからうたをびうたひけるも幼きころのみ

の君はあまに友とても無ければ出て師

に就けよにもあらず、おん蔵の二階に籠り

てうす暗き窓の光をうつかしみたふも思へ

ば十四五年のむかしにや。その頃は桜は

まだ植ゑられぬ未。

春をわば

茨城の野にて

しんら




村松長太郎

てうす暗き窓の光のこつかし
●よも鬼へ

は十四五年のむかしにゆ。その頃は桜は
まだ植ゑられず。

春ちわば

茨城の野にて

春ちわば
 山崎の野にて
 春ちわば

春ちわば
 山崎の野にて
 春ちわば

春ちわば
 山崎の野にて
 春ちわば